

要 旨

本研究では、豊かな人間性をはぐくむために、道徳の時間と体験活動を関連付けて取り組むことで、相手に共感できる児童の育成を目指した。共通の体験活動そのものを資料化して道徳の授業を行い、そこではぐくまれた道徳的実践力を生かす場として、授業後に体験活動を仕組み、ねらいとする道徳的価値に対する児童の意識の継続を図った。児童はこの一連の学習活動を通して、ねらいとする道徳的価値の自覚を深めると同時に、相手の思いや気持ちに気付き、受け止めて、感じとろうとする姿が見られてきた。

〈キーワード〉 ①共感 ②体験活動 ③資料化 ④道徳的実践力を生かす場

1 研究の目標

相手に共感できる児童を育成するために、道徳の時間において、体験活動を基にした授業の在り方を探る。

2 目標設定の理由

現代社会において、児童をとりまく環境も大きく変化し、小学校学習指導要領解説道徳編には、「児童の社会体験や自然体験、親や教師以外の地域の大人や異年齢の子どもたちとの交流の場が著しく不足している」¹⁾とある。

また、そのような体験の不足への対応として、豊かな道徳性の育成には、「集団宿泊活動やボランティア活動、自然や生き物とのかかわりを深める自然体験活動などの体験活動を充実させることが不可欠である」²⁾と述べてある。体験活動をその場限りの活動で終わらせるのではなく、児童の内面に根ざした道徳性が育成されるように、道徳の時間と体験活動を関連付けて取り組むことが重要であると考えられる。

また、研究テーマである豊かな人間性をはぐくむためには、心の交流を豊かにすることが大切である。相手に興味・関心を示し、相手とのかかわりの中で自分の生活や行動を考えようとするのが、道徳的実践力をはぐくむことにつながっていく。そのためには心の交流を通して相手の気持ちに気付き、受け止めて、感じとることが大切である。そして、このように、相手に共感できる児童を育成していくことが、豊かな人間性をはぐくむ上で重要になる。

そこで本研究では、グループの研究テーマ、研究課題を受け、豊かな人間性をはぐくんでいく上で、相手の思いや気持ちに共感できる児童を育成するために、共通の体験活動を基に書かれた児童の作文や、体験活動時の写真などの素材を資料化し、道徳の時間の中で用いることにした。その際、児童が相手の思いや気持ちを受け止めやすいように、資料提示の仕方や発問を工夫するようにした。また、体験活動[1]→道徳の時間→体験活動[2]という形で単元を構成することにより、道徳の時間を通して、児童が、より相手の思いや気持ちに気付き、受け止めるようになり、それを次の体験活動で確かなものにしていくことができるようにした。

体験活動を基にした資料を用いて道徳の授業を行い、共通の体験活動を通しての思いや気持ちを交流すれば、相手の気持ちを感じることができ、ねらいとする道徳的価値の自覚を一層深め、道徳的実践力を高めることができる。そして、相手の思いや気持ちに気付き、受け止めて、感じとりながら、よりよく生きていこうとする心情を高めていくことが、研究課題であるよりよく判断する力の育成につながっていくと考え、本目標を設定した。

3 研究の仮説

児童の体験活動と関連させた道徳の時間において、体験活動を基に児童が想起しやすい場面や思いを資料化し、その提示方法や発問を工夫すれば、相手の思いや気持ちに気づき、受け止めて、感じとる児童を育成することができるであろう。

4 研究の内容と方法

- (1) 道徳の時間と体験活動を関連付けた単元の構成や自作資料の作成についての理論研究
- (2) 体験活動後の道徳性に関するアンケート調査を基にした児童の実態調査
- (3) 仮説を検証するために、所属校の4年生における単元Ⅰ「本物の仲間になるために」と、単元Ⅱ「あきらめない心」の中で行う道徳の授業実践

5 研究の実際

- (1) 文献等による理論研究

ア 目指す児童像について

新・教育心理学事典によると、共感とは、「対人関係において、言語や表情、態度などの媒介を通して、相手の感じ方・気持ちを相手の身になって感じとること。」³⁾と記されている。これを受けて、本研究では、目指す児童像に向かう段階として、受け取り方や考え方の多様性を知る【気付く】、他者を受容する（相手の視点から考える）【受け止める】、相手と自分の思いや気持ちを重ねたり、比較したりしながら、よりよい考えを生み出そうとする【感じとる】の3つのステップを考え、体験活動と関連させた道徳の時間を通して、相手に共感できる児童の育成を目指すことにした。

イ 体験活動を基にした道徳の時間について

ここでの体験活動とは、学校教育活動の中に含まれるもので、課題解決能力や実践的な態度を身に付けることを目的として、学級の児童全員が同じ活動をするものとして定義付ける。

体験活動を基にした道徳の時間の指導については、小学校学習指導要領解説道徳編の中に、「体験活動の活動内容と似た題材等を道徳の時間で生かし、それぞれの指導相互の効果を高める工夫も考えられる。」⁴⁾とある。そのためには、体験活動を想起し、実感を深めやすい資料を準備したり、体験を想起して発表することができるような発問を工夫したりすることが大切だと考えられる。

- (2) 研究の全体構想

まず、体験活動[1]の中に含まれている、複数の道徳的価値の中から、ねらいとする道徳的価値を焦点化する。そして、様々な活動場面から児童が受け止めやすい場面を選び、体験活動を基にした自作資料で道徳授業を行う。

さらに、道徳の時間にはぐくんだ道徳的実践力を生かす場として、ねらいとする道徳的価値を意識しやすい体験活動[2]を仕組む。

これらの一連の学習活動により、児童は、道徳の時間に考えたことを確かなものにしなが、相手の思いや気持ちに気づき、受け止めて、感じとることができるようになっていくと考えた。

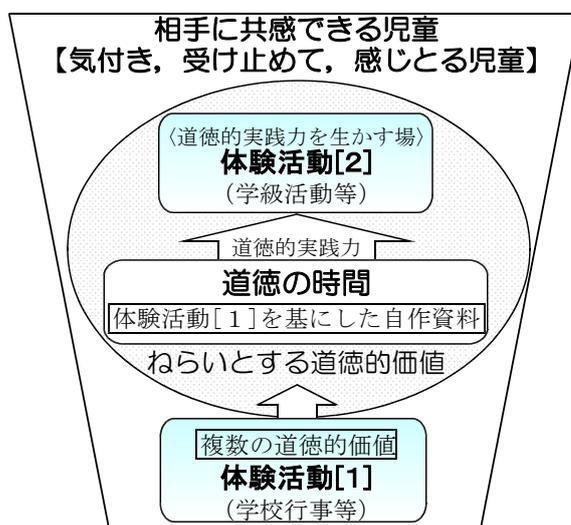


図1 全体構想図

(3) 手立てについて

ア 道徳の時間と体験活動を関連付けた単元構想

児童が体験活動の中で感じ、考えた道徳的価値の自覚を深めるために、道徳の時間と体験活動を関連付けた単元を、表1のように、体験活動[1]→道徳の時間→体験活動[2]で構成した。

検証授業①では、総合的な学習の時間に取り組んだ宿泊体験学習を体験活動[1]として設定し、その中に含まれている複数の道徳的価値の中から、ねらいとする道徳的価値を「友情・信頼、助け合い」とした。そして、体験活動[1]の中の一場面を資料化して授業を行った。その後、体験活動[2]として「仲良しゲーム大会」を実施して、意識の継続を図った。

また、検証授業②では、学校行事の「校内マラソン大会」を体験活動[1]と設定し、ねらいとする道徳的価値を「勤勉・努力」に焦点化し、自作資料を用いて授業を行った。その後、体験活動[2]として、自分のめあてに向けてがんばって取り組めるように、体育で「長縄大会」を実施して、意識の継続を図った。

このような単元構成で取り組むことにより、ねらいとする道徳的価値に対しての意識の高まりを、道徳授業や体験活動[2]での児童の様子や感想などから見取ることにした。

また、相手の思いや気持ちに気付き、受け止めて、感じとる児童の姿を、道徳の時間と体験活動[2]を中心に見取った。

イ 体験活動[1]の資料化及び授業構想

体験活動[1]の中にある様々な活動場面の様子(素材)を基に、表2の手順で資料化を行った。

手順ウでは、児童の実態を把握するために、体験活動[1]の後に、意識調査を実施し、その結果を考慮しながら、授業のねらいを明確化した。

手順オでは、図2のような、ねらいに合った児童の作文の一部を用い、本人の承諾を受けて資料化した。その際、読み物資料という形ではなく、場面絵や言葉を中心にして教師が話をしていくようにした。

また、次頁の表3に示す通り、授業の導入や終末部分では、効果的に素材を活用するために、体験活動[1]を想起させたり、授業に余韻をもたせたりするために写真や映像などを見せた。展開では、特定の児童が不快に思わないように配慮し、主人公の設定(性格的なもの、今までの態度やものの考え方など)については、細かい部分まで考え、さらに、場面絵を作成するなど資料提示の方法を工夫して展開を組み立てた。

表1 道徳の時間と体験活動を関連付けた単元構想

	検証授業①	検証授業②
単元名	本物の仲間になるために	あきらめない心
体験活動[1]	総合的な学習の時間 「小値賀島キャンプ」	学校行事 「校内マラソン大会」
体験活動[1]に含まれる道徳的価値(中学年)	○礼儀 ○思慮・反省、 節度・節制、自立 ○友情・信頼、助け合い ○自然愛・動植物愛護	○勤勉・努力 ○個性伸長 ○友情・信頼・助け合い
ねらいとする道徳的価値	友情・信頼、助け合い	勤勉・努力
道徳の時間資料名	「一緒に飛ぼう」	「ゴールに向かって」
体験活動[2]	学級活動 「仲良しゲーム大会」	体育 「長縄大会」

表2 体験活動を資料化する手順

ア	体験活動時の素材収集 ※素材(編集されていないビデオ映像や音声、写真、作文など)
イ	ねらいとする道徳的価値の焦点化
ウ	ねらいとする道徳的価値に対する、児童の実態把握
エ	授業のねらいの明確化
オ	中心資料の作成
カ	授業展開に生かす効果的な素材活用(ビデオ映像の編集等)

海に飛び込むときに、
「一緒に飛ぼう。」
と言ったら、
「あそこはこわいから、いやだ。」
と言ったから、もう一つ低い所から、
いっしょに飛んだ。

図2 検証授業①の中心資料を作成する際に基にした、児童作文(素材)の一部

発問については、ねらいとする道徳的価値に対する意識調査や体験活動[1]についての作文などから、児童がどのような体験をし、どのような思いや気持ちになったかを予め把握しておき、資料の場面によっては児童自身に問い掛けたり、意図的指名を行うよう工夫した。

以上の様な手順を踏み、体験活動[1]を基にした自作資料で道徳の授業実践を行い、体験活動を基にした自作資料に対する関心・意欲とねらいとする道徳的価値の自覚の深まりを見取った。

表3 資料提示と発問の工夫

授業の流れ	資料提示	◎効果 ※留意点	発問や指示の意図
導入	<ul style="list-style-type: none"> 体験活動[1]の写真 体験活動[1]の映像 	◎ 体験活動[1]の想起 ※ 映っている児童が不快に思わないように配慮して編集を行う。	<ul style="list-style-type: none"> 映像などは、視点を与えて見せる。 体験活動[1]での気持ちを想起させる。 ねらいとする価値への導入を図る。(体験活動[1]における、ねらいとする道徳的価値に対する意識はどうか)
展開前段	<ul style="list-style-type: none"> 作文等を基にして資料を作成 場面絵 言葉(短冊) 	◎ 表情を中心に描いた場面絵を提示することにより、登場人物の心情を考える手助けとする。 ※ 中心資料の内容の基になっている児童に配慮して、場面絵を用いる。	<ul style="list-style-type: none"> 体験活動[1]を基にした自作資料を用いて、授業のねらいに沿った発問を行う。 事前の意識調査や作文などを基に、児童の思いを把握し、意図的指名をする。 実際に同様の体験をしてどう思ったか、児童自身に問い掛ける。
展開後段	<ul style="list-style-type: none"> 特にここでは資料提示は行っていない。 		<ul style="list-style-type: none"> 自己を見詰める発問をして、互いに認め合う活動を取り入れながら、共感的な雰囲気を作る。
終末	<ul style="list-style-type: none"> 体験活動[1]の写真 体験活動[1]の映像 児童の作文等の言葉 	◎ 印象的な場面や、高い道徳的価値観が見られる児童の姿や言葉などを提示し、余韻をもたせる。	<ul style="list-style-type: none"> 映像などは、視点を与えて見せる。(自分たちの中にも、ねらいとする道徳的価値に対する高い意識があることを感じ取らせる。)

(4) 授業の実践と考察

先に述べた手立ての有効性を確かめるために2つの単元を計画し、その中で2時間の授業実践を行った。検証の視点は、表4に示す3点である。

表4 検証の視点

検証Ⅰ	体験活動を基にした自作資料に対する関心・意欲
検証Ⅱ	ねらいとする道徳的価値に対する意識の高まり
検証Ⅲ	相手の思いや気持ちに気付き、受け止めて、感じとる姿の表れ

ア 体験活動を基にした自作資料に対する関心・意欲(検証の視点Ⅰ)

授業後に、「道徳の時間の楽しさ」「内容の分かりやすさ」「登場人物の思いや気持ちの考えやすさ」という3つの点から、自作資料への関心・意欲を見取った。

表5に示す通り、どの項目においても、学級全体の90%以上の児童が自作資料に対する高い関心・意欲を示した。

表5 道徳の時間に関する関心・意欲(児童数26名)

児童の回答	検証授業①	検証授業②	自作資料で行った授業に授業に対する児童の記述
道徳の時間が楽しかった	92%	96%	<ul style="list-style-type: none"> みんなが体験したことで周りの人の思ったことと比べられるから。 ビデオなどでふり返ったことが、とてもなつかしかったから。
内容が分かりやすかった	92%	92%	<ul style="list-style-type: none"> 自分が体験したから、気持ちの分かりやすかった。 実際に自分が思ったりしたことが言えるから、分かりやすかった。
登場人物の思いや気持ちをよく考えた	96%	96%	<ul style="list-style-type: none"> マラソン大会(体験活動[1])のことをよくふり返って考えることができて、経験したことなので考えやすかった。 そういう経験がぼくにもあったので、考えられました。

理由としては、自ら体験したことそのものが資料となっていた点を挙げている児童が多く、資料化した場面についても、「似たようなことがあった」など、自分の経験と照らし合わせて考え

ることができていた。また、写真や映像で体験活動のことを思い出したという意見も見られた。

導入・展開・終末の各段階において、活動時の素材を効果的に生かすことで、児童に体験活動のことを想起させやすくなり、それが楽しさや分かりやすさにもつながっていったと考えられる。また、共通の体験活動そのものを資料化したことで、自分の体験を基に考えることができ、資料中の主人公の気持ちをよく考えることができたと思われる。

このことから、共通の体験活動を基にして、映像や写真を用いた自作資料で道徳授業を行うことで、資料に対する関心・意欲が高まったと考えられる。

イ ねらいとする道徳的価値に対する意識の高まり（検証の視点Ⅱ）

【検証授業①について】

検証授業①で行った道徳授業における、ねらいとする道徳的価値「友情・信頼、助け合い」に対する、児童の意識の高まりを見るために、「友情・信頼、助け合い」に関する質問を表6のように考え、体験活動[1]の後と[2]の後に実施した。

図3に示す通り、質問の7項目中、5項目で意識の高まりが見られた。特に、道徳授業のねらいにかかわる、質問3の「周りの友達を分かちあおうとしたか」については、意識の高まりが顕著に見られた。

しかし、質問4と質問7の2項目については「いつもできた」と回答した児童の割合が減っていた。これは、体験活動[2]が楽しい内容ではあったが、達成感を味わう場面や困るような場面がなかったことが原因だと考えられる。

このことから、体験活動[2]を仕組むことは有効ではあるが、道徳授業で学んだことをより生かすことができるような活動を意図的に仕組むことが大切であると考えた。

【検証授業②について】

検証授業②では、体験活動[1]（マラソン大会）での児童の様子と意識調査の内容から、ねらいとする道徳的価値を「勤勉・努力」と設定した。意識調査では、目標に向かってがんばったと回答した児童が多かったが、その内容については30%の児童にしか、具体的な記述が見られなかった。そこで、結果よりも、目標に向かって自分が粘り強くがんばることで充実感を味わえることに気付かせたいと願い、マラソン大会や、それまでの練習を基にした自作資料で授業を行った。

授業では、次頁の表6に示す通り、主人公が友達から追い抜かれている場面で、ほとんどの児童は自分達の体験を基に、「悔しい」や「嫌になる」と、「目標に向かってがんばる」という2つの気持ちを考え、葛藤している主人公の思いに気付くことができた。そして、ゴールした後の主人公の笑顔から、多くの児童は「目標を達成できなかったけど、最後まで走れてよかった」など、がんばったことで得られる喜びや、練習をしてきたからこそ味わえる達成感を感じ取ることができたと感じた。

表6 ねらいとする道徳的価値「友情・信頼、助け合い」に対する意識調査の質問内容

番号	質問内容
質問1	友達が困っているとき、進んで助けようとしたか。
質問2	友達を仲間だと思い、男女仲良くできたか。
質問3	周りの友達を分かちあおうとしたか。
質問4	友達と協力して、一緒に何かできたか。
質問5	周りの友達は、困っているとき助けてくれたか。
質問6	周りの友達は、男女関係なく仲良くしてくれたか。
質問7	困っているとき、友達は声をかけてくれたか。

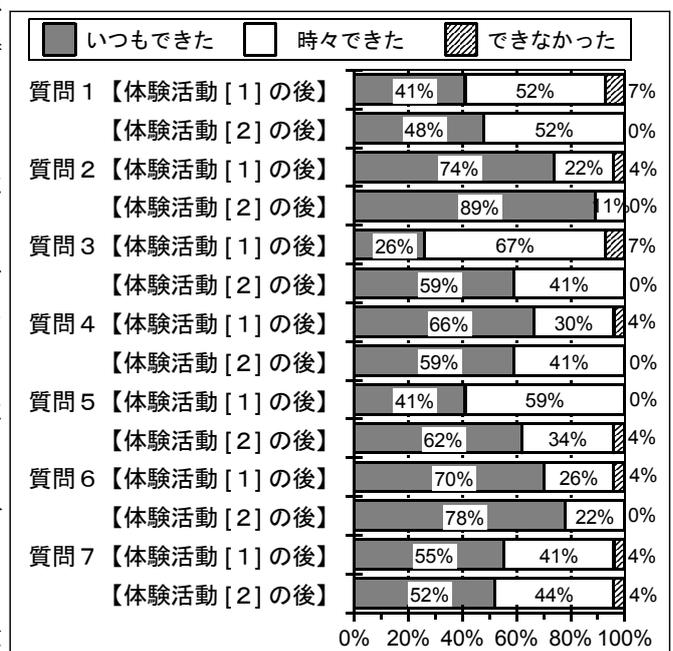


図3 ねらいとする道徳的価値「友情・信頼、助け合い」に対する意識の変容（検証授業①）

表7 検証授業②の記録 資料名「ゴールに向かって」

	◆資料提示 ○発問の意図	T：教師の発問・発言（※：A児） C：児童の発言
導入	<p>◆マラソン大会(体験活動[1])の写真【中心資料への導入】</p> <p>◆マラソン大会の練習時の映像【中心資料への導入】</p> <p>○観る視点を指示</p>  <p>○ねらいとする道徳的価値への導入を促す発問</p>	<p>T1・これ、何の写真かな？</p> <p>C1・マラソン大会。(体験活動[1]の想起)</p> <p>T2・君たちは12月に「体力作り週間」があって、マラソンの練習をしましたね。そして12月11日に、マラソン大会がありました。今日は、最初にその練習の時のビデオを見てもらいたいと思います。<u>がんばっている自分を思い出しながら見て下さい。</u></p> <p>T3・みんなは、マラソン大会に向けて、どんな目標を立てましたか。</p> <p>C2・5位以内に入る。</p> <p>C3・最後まで歩かない。</p> <p>T4・みんなそれぞれあったんですね。では、<u>目標に向けて、どんなことを考えながら練習していましたか。</u></p> <p>C4・最後まであきらめないで走る。</p> <p>C5・できるだけ、歩かないようにならぼう。</p>
展開前段	<p>◆児童作文を基にした中心資料の提示(場面絵)</p>  <p>○同様の体験をしている児童自身の思いを引き出す発問と意図的指名</p> <p>○同様の体験をしている児童自身の思いを引き出す発問</p> <p>◆短冊「がんばれ。あとちょっと。」提示</p> <p>○研究目標である相手に共感できる児童を育成することにかかわる意図的な発問</p> <p>○同様の体験をしている児童自身の思いを引き出す発問</p>	<p>《マラソン大会で途中から疲れて、友達に抜かれていった場面》</p> <p>T5・「私」は、心の中でどんなことを考えていると思いますか。</p> <p>C6・毎朝走って練習したのに、くやしい。</p> <p>C7・きつくて友達に抜かれても、最後まで精一杯がんばろう。</p> <p>T6・<u>みんなも、同じような気持ちになったことはないですか。C8さん、どうですか。どんな気持ちになりましたか。</u></p> <p>C8・最後になるかもしれないけど、自分のペースで走ろうと思った。</p> <p>C9・なるべく、その目標に近付けるようにならぼう。</p> <p>T7・くやしいという気持ちはないの？</p> <p>C10・半分くらいある。</p> <p>T8・こういう2つの思いがあるんですね。それでも「私」は走り続けました。「私」は、どんな気持ちで走り続けたのでしょうか。</p> <p>C11・目標に向かって、越されても絶対に走り続ける。</p> <p>A児・せつかく練習をした意味がなくなる。(※)</p> <p>T9・<u>君たち、抜かれたらどんな気持ちになる？</u></p> <p>C13・走るのがいやな気持ち。</p> <p>C14・いやだと思ふ気持ちにもなるけど、自分のペースでがんばる。</p> <p>C15・目標を立てたから、がんばろうと思う。</p> <p>T10・ゴールまであと少し。でも、もう足の感覚がありません。もう歩こう…。そのとき、声が聞こえてきました。「がんばれ。あとちょっと。」</p> <p>T11・<u>友達の声援を受けながら、「私」はどんなことを考えたでしょう。</u></p> <p>C16・応援している人がいるから、最後まで走ろう。</p> <p>T12・<u>君たちも、マラソンの練習やマラソン大会のとき、こういう声が聞こえてきましたか。</u></p> <p>C17・はい。うれしかった。</p> <p>C18・自分も応援しようと思った。</p> <p>~~~~~(中略)~~~~~</p> <p>T13・「私」はゴールをして、どんなことを思ったのでしょうか。</p> <p>C19・目標は達成できなかったけど、最後まで走れてよかったという気持ちと、応援してくれてうれしいという気持ち。</p> <p>A児・去年は歩いてしまったけど、今年は歩かないで走れた。31位はくやしいけど、また来年も走れば、きっと順位は上がるはず。一生けんめい走れたから、大じょうぶ。(※)</p> <p>C21・朝、走ったりして練習してきたし、目標に向かってがんばろうと思ったし、応援があったから、最後まで走れてよかった。</p> <p>A児・練習していたから、がんばろうとして、そういう気持ちになったと思う。(※)</p>
展開後段		<p>T14・みんなも、今日の「私」のように、頑張れてよかったと思えたことはありませんか。今、頑張っていることでもいいよ。</p> <p>C23・ぼくは、簡単な間違いが多いから、計算をしているときに、見直しをして、間違えないようにしている。</p> <p>C24・足が速くなりたいから、ダッシュやランニングをしている。</p> <p>T15・みんなは、いろんな場面で頑張っているみたいですね。</p>
終末	<p>◆マラソン大会(体験活動[1])の写真のスライドショー提示</p> <p>○見る視点を指示</p>	<p>T16・最後に、マラソン大会での、みんなの頑張っている姿を一緒に見たいと思います。みんなも、<u>友達がどんな気持ちで走っているのか考えながら見て下さい。</u></p>

A児の発言を基に考察する。図4に示す通り、マラソン大会で、主人公が友達に追い抜かれていったときの気持ちとして、練習を続けてきたことの意味に気付いていなかったが、友達の発言を聞きながら、その後、歩かないで走れたことで「大じょうぶ」と自信のある発言をしている。その根拠として、「練習していたから、そのような気持ちになった」というように考えが変わってきており、ねらいとする道徳的価値「勤勉・努力」に対する意識の高まりが見られた。

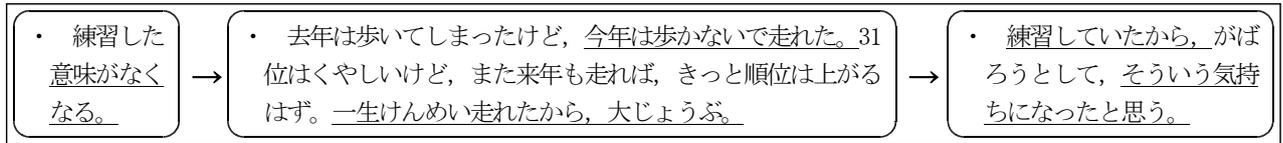


図4 検証授業②におけるA児の発言

また、体験活動[2]「長縄大会」に向けて、自主的に練習する児童の姿も多く見られた。目標に向けてがんばった内容についても、88%の児童にB児のような具体的な記述が見られ、C児のように記録が伸びなくても、あきらめずにがんばれたことを喜ぶなど、道徳の時間にはぐくんだ道徳的心情が、実践を通して、より確かなものになってきたことが伺えた。

・ ぼくの目標は、なるべく連続で跳ぶことでした。だから、家でも練習しました。昼休みの時間もつかってしました。いつもしているサッカーをやめて、毎日練習しました。毎日くり返しくり返しやりました。…2回目が、最高記録の3分24秒で、3分30秒の目標を達成できました。この記録で、ぼくは満足です。

図5 「長縄大会」後のB児の感想

・ 練習のときは2分38秒だったけど、本番は3分6秒でした。なので、ちょっとがっかりしたけど、ぼくは、それでもよかったなと思いました。…2分38秒の方がタイムはいいけど、3分6秒や4分44秒の方が、声出しや最後まであきらめない気持ちは大きかったと思いました。だから、昼休みに練習してよかったと思いました。

図6 「長縄大会」後のC児の感想

ウ 相手の思いや気持ちに気付き、受け止めて、感じとる姿の表れ（視点Ⅲ）

表8 相手の思いや気持ちを聞いて考えたことに対する、児童の主な記述

気付く	<ul style="list-style-type: none"> 自分の考えとよく似ていた。 みんな、いろいろなことを考えているなと思った。人それぞれ意見がちがうんだと思った。
受け止める	<ul style="list-style-type: none"> 自分とちがう意見の人がどんな考え方をしたか、考えた。 〇〇さんの発表と私の思っていることはちがったから、その考えもあるんだなあと思った。
感じとる	<ul style="list-style-type: none"> 〇〇ちゃんが「抜かれても自分のペースで走ろうと思った。」と聞いて、私は〇〇ちゃんは、最後まであきらめずにがんばろうと思ったということが分かった。私は、そういうところをまねしたいと思う。 最初は「走るのがいや」という意見ばかりだったけど、と中から「がんばろう」という前向きな意見ばかり出たので少しびっくりした。その意見を聞き、たしかにそう思うかもなあと思った。

検証授業において、相手の思いや気持ちを聞いて考えたことに対する、児童の主な記述を、表8に示す。

「似ていた」や「意見がちがう」のように、相手の考えの多様性に気付いたり、「(友達は)どんな考え方をしたか、考えた」と、相手の視点で考えたりした記述が見られた。さらに、友達の考えを「まねしたい」と、自分の中に取り入れようと考えたり、自分とは異なる意見に、「たしかにそう思うかもなあ」と納得したりした記述などから、相手の思いや気持ちを受け止めながら、考えようとする姿勢が感じられた。

また、検証授業②において、共感にかかわる

表9 共感にかかわる意識調査の質問内容

番号	質問内容
質問1	周りの友達の気持ちを分かってあげようとしたか。
質問2	友達を励ましたり、応援したりしたか。
質問3	友達から励まされたり、応援されたりしたか。

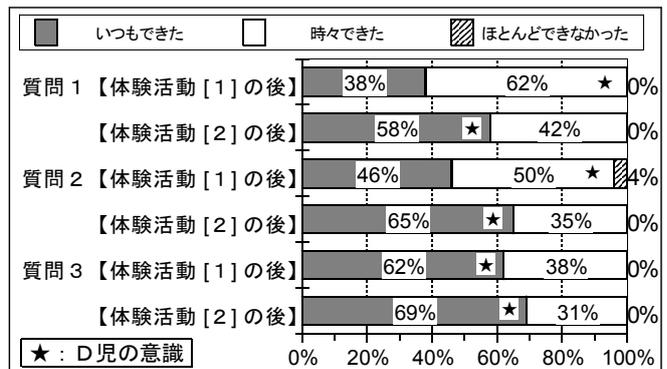


図7 共感にかかわる意識の高まり（検証授業②）

3つの質問（表9）を、体験活動[1]と[2]の後に実施し、図7のように比較したところ、3つの質問全てで意識の高まりが見られた。児童は道徳の時間を通して、より相手の思いや気持ちに気付き、

受け止めるようになり、それが体験活動[2]で確かなものになっていったと考えられる。

検証授業②での、一連の学習活動を通して、共感にかかわる児童の意識がどのように高まってきたか、図8のD児の記述を基に考察する。

D児の、体験活動[1]のマラソン大会の感想には、順位に固執した内容の記述が見られた。練習の様子からも、友達との競争意識が高いことが伺えた。

道徳授業の中では、目標への努力だけでなく、周りの応援の大切さにも気付くことができた。そして、体験活動[2]では「連続でとぶ」という目標へ向けてがんばるだけでなく、周りの友達を励ましなが

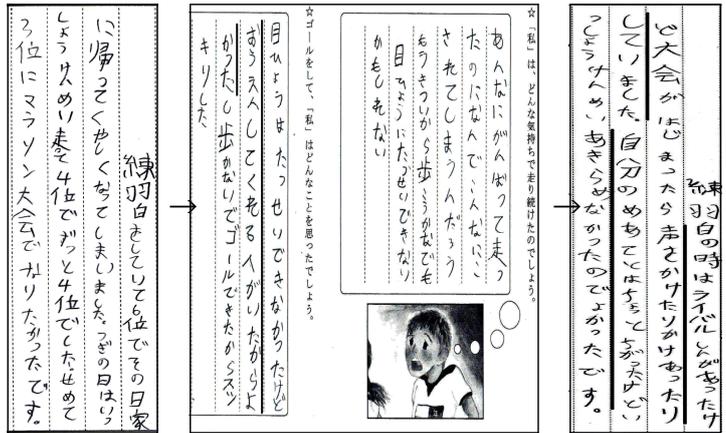


図8 検証授業②におけるD児の記述

ら、最後まであきらめなかったことに喜びを感じており、前頁の図7の表からも、共感にかかわる意識の高まりが見られた。

また、図9に示す通り、他の児童の記述の中にも、友達の、あきらめない気持ちに気付いたものや、「跳べない気持ちがよく分かった」と、長縄が苦手な友達の気持ちを受け止めたり、練習で転んだ友達に対し、自分が転んだときのことと重ねて考え、「安心してほしいから」と声をかけたりしたものがあり、相手の思いや気持ちを受け止めて、感じとろうとしている姿の表れであると考えられた。

- ・ 最後まで、長縄をしていた〇〇チームを応援した。最後まで、あきらめずにやっているなあと思った。
- ・ 〇〇さんが、どうしても止まって、跳ぼうと思っても跳べない気持ちがよく分かった。
- ・ 練習で転んだ人に「あきらめないで」「大じょうぶ」と声をかけた。私が転んだときもしてくれたから、私もまねしてみようと思った。そして、安心してほしいからした。
- ・ 〇〇さんは、跳ぶのが苦手だから、少し回す縄のスピードを遅くしてあげた。

図9 体験活動[2]の後の児童の主な感想

6 研究のまとめと今後の課題

(1) 研究のまとめ

ア 道徳の時間と体験活動を関連付けることは、共感的な雰囲気の中で、ねらいとする道徳的価値について意識を継続し、確かなものにしていくことに有効である。

イ 共通の体験活動を基にした自作資料で授業を行うことで、児童は資料への関心を高め、相手の思いや気持ちに気付き、受け止めることができるようになると考えられる。

(2) 今後の課題

ア 相手により共感できる児童を育成するための単元構成と体験活動[2]の仕組み方について、今後も研究する必要がある。

イ 意識調査や授業の感想などを基にした、個への支援の在り方も研究していく必要がある。

《引用文献》

1)2)4) 文部科学省

『小学校学習指導要領解説 道徳編』 平成20年
東洋館出版 p.22 p.93

3) 依田 新

『新・教育心理学事典』 1997年 金子書房 p.193

《参考文献》

・ 押谷由夫・心を育てる教育研究会共著

『子どもと教師の心がはずむ道徳学習』 平成12年
東洋館出版